

氏 名 甲 田 直 美
 学位(専攻分野) 博 士 (人間・環境学)
 学位記番号 人 博 第 96 号
 学位授与の日付 平 成 12 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
 研究科・専攻 人間・環境学研究科人間・環境学専攻
 学位論文題目 談話・テキストの展開のメカニズム
 ——接続表現と談話標識の認知的考察——

論文調査委員 (主 査) 教 授 山 梨 正 明 教 授 大 木 充 助教授 河 崎 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、日本語の接続表現と談話標識の分析に基づく談話・テキストの展開のメカニズムの解明にある。全体は6章から成る。

第1章では、談話・テキストの研究が人間の言語理解のメカニズムと自然論理の解明にもたらす意義を述べ、談話・テキスト研究における本研究の位置づけを行うとともに、接続表現と談話標識に関する従来の研究を批判的に検討している。従来のこの分野の研究は、談話・テキストの展開のメカニズムの手がかりを結束性を担う語彙手段に求めるアプローチと、推論や前提的知識などの言語外の情報に求めるアプローチに大別されるが、これらのアプローチでは、日常言語を特徴づける談話・テキストの展開の論理の柔軟性が包括的には説明されていない。本研究はこの点を踏まえ、続く四つの章において、談話・テキストの展開のメカニズムを、特に接続表現と談話標識の意味機能と語用論的機能の観点から多角的に分析している。

第2章では、まず接続表現と談話標識によって連結される談話・テキストの補完的な理解に関わる現象を、発話行為の機能、論理的含意、Grice 流の会話の含意などの意味的要因と語用論的要因との関連で考察している。この章では、特に日常言語の前件と後件の関係の特徴づける接続助詞と接続詞に関わる現象を分析することにより、前件と後件の連結構造から誘引される含意として、時間関係にそった並列性（ないしは並存性）と因果関係の二種類の含意の存在を明らかにし、この種の含意が、真理条件を前提としながらも、これを越える受け手（聞き手）側の語用論的な推論によって誘引される事実を明らかにしている。

第3章では、談話・テキストの理解における受け手（聞き手）の情報処理のプロセスの観点から、接続表現が文連鎖の理解にどのように影響しているかに関する分析を行っている。特にこの章では、文連鎖の理解の促進や干渉のデータを綿密に分析し、前件・後件の命題内容と接続表現の関係から解釈される因果関係、順接関係、付加関係等の談話・テキストの展開の論理と言語理解の難易度の関係を明らかにしている。さらに、本章では、多様な文連鎖の理解の促進や干渉のデータの分析に基づき、文連鎖を構成する二つの命題が、談話・テキスト解釈の首尾一貫性の方向と対応する原因→結果、前提→帰結、一般→個別、旧情報→新情報等の順序に従って理解が容易になる事実を明らかにしている。また、この種の談話・テキストの展開を促進する原因が、事象の生起順序をデフォルト的に規定する因果関係のスキーマと情報の流れの方向をデフォルト的に規定する起点－経路－目標のスキーマに起因する点を明らかにしている。

第4章では、談話・テキストの結束性と首尾一貫性に関わる接続表現と談話標識の語用論的機能と主題の推移、事態間の主観的な関連づけ、接続表現と談話標識のメタ言語的機能に関する綿密な考察を行っている。この章では、まず接続表現と談話標識の選言接続、並列接続等にかかわる現象を広範に分析し、前件と後件の接続関係の対称性の度合の基準から、この種の連結にかかわる接続表現と談話標識の綿密な分類を行っている。次に、接続表現と談話標識の使い手の主観的な認知プロセスに注目し、複合事態に関する時・空間にかかわる経験が、談話・テキストの展開の解釈にどのように影響しているか

を分析している。そのなかでも、特に時・空間の経験に基づく接続表現の使い手の主観的な視点が、選言接続、並列接続として表現される談話・テキストに、因果関係とその理由づけに関する事態間の主観的な解釈を与えていくプロセスが明らかにされている。さらに、第4章では、書かれたテキスト・データだけでなく、日常会話や対話における話者交替にかかわる接続表現の語用論的な機能を考察し、話者の発話態度、ムード、モダリティ等の要因と順接、逆接の接続表現の選択の相互関係を分析している。

第5章では、ナラトロジーの視点を考慮し、日常言語のテキストのデータから、文学テキストの言語事例にみられる接続表現と物語叙法の問題に焦点を移し、日常言語のテキストと文学テキストの文接続の機能の違いを明らかにしている。この章では、特に現実世界や可能世界の事態の叙述と事態の展開、理由づけ等を主眼とする日常言語のテキストの語りと、現実世界や可能世界の事態の展開や理由づけを必ずしも直接的に反映しない文学テキストの語りの基本的な違いを、人称、語り手等の顕在化されているテキストと顕在化されていないテキストの比較に基づいて明らかにしている。

第6章では、談話・テキストを構成する文連鎖に反映される結束性と首尾一貫性が、(i) 接続表現の語用論的な機能と命題構造にかかわる言語的知識と、(ii) 問題の談話・テキストに関する言語外的な知識の両面の情報処理のプロセスによって保証される事実を明らかにしている。従来の談話・テキストの結束性と首尾一貫性に関する研究では、とくに接続表現と文連鎖の形式的な手がかりと命題相互の意味的な手がかりの解明に力点が置かれていた。これに対して本章では、談話・テキストの結束性と首尾一貫性は、これらの言語的な知識のレベルの研究から予想される以上に、言語外の知識に関わる補完的理解（より具体的には、因果関係や事態のつながりに対する主観的な視点の投影、文脈・場面から誘引される語用論的な推論、言語外の知識から一般的に誘引されるデフォルト的推論、等に基づく理解）が重要な役割をになっている事実を指摘している。本章では、さらに以上の考察を背景に、談話・テキスト研究における本研究の意義と今後の展望が論じられている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、日本語の接続表現と談話標識の体系的な記述と綿密な分析に基づいて、談話・テキストの展開のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。

従来の伝統的な言語学の研究は、主に文・文法のレベルの言語現象の分析が主眼となり、談話・テキストのレベルに関わる言語現象に関しては体系的な研究は本格的にはなされていない。これに対し、本研究は、結束性と首尾一貫性に関わる接続表現と談話標識の意味機能と語用論的な機能を幅広い言語データに基づいて分析することにより、日常言語の談話・テキストの展開のメカニズムの解明を試みている。

これまでの言語学、特にテキスト言語学や談話分析を中心とするこの方面の研究は、主に談話・テキストを構成する文連鎖に関わる接続表現や談話標識の形式的な手がかりの研究と文連鎖を構成する前件と後件の論理的な手がかり（ないしは意味的な手がかり）に基づいて、談話・テキストの結束性、首尾一貫性の解明を試みている。しかし、これらの研究では、文連鎖の前件と後件から誘引される発話の力、会話の含意、デフォルト的な推論を介しての含意といった語用論的な要因と談話・テキストの結束性（ないしは首尾一貫性）の関係は明らかにされていない。本研究は、接続表現と談話標識を特徴づける意味的な要因だけでなく、この種の語用論的な要因が、日常言語の談話・テキストの展開のメカニズムの基盤となっている事実を、日本語の接続詞、接続助詞、談話標識を中心とする豊富な言語データの分析によって明らかにしている。この点が、本論文の注目すべき研究成果の一つとして挙げられる。本論文の第二の注目すべき点は、日常言語の連結構造を可能とする接続表現の背後に存在する自然論理（natural logic）と形式論理学の結合詞の意味機能（ないしは論理機能）の関係を明らかにしている点にある。日常言語の選言、等位、条件等の関係を反映する接続表現には、これまでの言語学の形式意味論や論理学で規定されている真理条件に関わる要因と、文連鎖の背後の事象間関係に対する言語主体の主観的な解釈に関わる要因が複合的に関係している。本論文は、広範な接続表現の綿密な分析に基づき、言語主体の主観的な解釈に関わる要因（特に、(i) テンス・モダリティに関わる要因、(ii) 発話行為の機能に関わる要因、(iii) 語用論的な会話の含意に関わる要因）を、文連鎖の背後の命題関係を規定する真理条件的な要因から体系的に区別している。この分析を通して、日常言語の論理的な機能と語用論的な機能の関係を明らかにしている。さらに、本研究で注目すべき点は、接続表現や談話標識が談話・テキストの情報処理のプロセスにおいて果たす役割を、順接、逆接、並列、条件、付加等の接続関係との関連で明ら

かにし、語用論の中心理論である関連性理論の妥当性を批判的に検討している点にある。基本的に、関連性理論では、文連鎖の情報処理のプロセスを効率性と経済性の問題として扱っている。これに対し、本研究は、逆接、条件、付加等の複合的な文連鎖を含む日常言語の情報処理のプロセスは、処理の効率性と経済性だけでなく、表現効果による処理の複雑さと処理の効率性の相関によって相対的に決定される事実を明らかにし、関連性理論の限界を指摘している。

本研究がめざす談話・テキストの展開のメカニズムの解明は、人間の柔軟な文脈理解、日常言語の伝達行動の基底にある自然論理と思考プロセスの解明を可能にしていくものとして期待される。言語理解のメカニズムの研究は、現在、言語学、認知心理学、言語情報処理をはじめとする認知科学の関連分野の重要な研究テーマとして注目されている。本研究は、柔軟な情報処理を可能とする人間の認知機構の一部としての言語理解のメカニズムの解明に貢献する研究として高く評価できる。

本論文の研究成果の一部は、既に言語学関係の学術誌と紀要に発表されている。第4章の一部は、『日本語学』(Vol. 13, 1994; Vol. 15, 1996), 『言語科学論集』(Vol. 1, 1996), 『日本語教育』(Vol. 89, 1996) に、第5章の一部は、『表現研究』(Vol. 67, 1998) に発表されている。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは、言語情報処理、心理情報処理をはじめとする人間の認知のメカニズムを明らかにしていくことにあるが、本研究は、この目的に沿った研究として高く評価できると共に、談話・テキストの言語研究と情報処理の関連分野への貢献が、今後さらに期待される。

よって本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成12年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。